

天和三年三月二十九日
品川 鈴ヶ森刑場

お七殿…

どうしてこのようなことになつてしまったんだ…

オオオオオ

大江戸ダーティ★ヒロイン シリーズ第一弾

八百屋お七異聞

comic by 連野悠二

◇江戸の悪女を新解釈で描く官能時代劇シリーズ開幕！

始まりは昨年
天和二年十二月二十八日
年の瀬も迫った寒い日に
起きた大火

駒込大円寺から
出火した炎は
瞬く間に神田台地
一帯を焼き尽くした

吉三郎
それを置いたら
あちらを手伝って
きなさい

あ
はい

吉三郎は訳あって
駒込正仙寺に
若衆として世話に
なっていた

わかりました
和尚様

正仙寺には
焼け出された
江戸の庶民が
避難してきて
いたのだった

大丈夫ですか？
私目が良いですから
抜いて差しあげましょう

いてっ！

指に
トゲが…

あ…

そこで二人は
出会ってしまった

あ

娘の名はお七
本郷森川宿の青物問屋の
一人娘

大名家を顧客に持つ
お七の家は裕福な商家で
何不自由なく過ごしていた

吉三郎様…

若い二人は
すぐに恋に落ちた







え...えつと
あれ?

うまく...
入らない...

あ

ハ...ハハハ
カチカチ

かつ...
かたじけない...

こ...で...
よろしいで...
ござるか?

はい...
そのまま奥へ...



吉三郎様と
一つになれたことが
嬉しゅうございます



大丈夫で
ござるか？

ちよと…
痛かった
ですけど…



私には
夢があるのです



お七殿！

私の家は譜代大名の家老を代々務める武家でした

しかし主家が
世継ぎ問題で
お取り潰し

煽りを喰らい
家老であつた我が家も
家名断絶 一家離散
となつたのです

年若かった私は
ご住職の計らいで

こちらのお寺で
若衆としてお世話に
なっているのです

いつの日か必ず
仕官を果たし

必ず武家として
家名を再興
させるのです

あ
あ
あ
あ
あ

その時はお七殿
正室として私の所へ
来て下され

はい

二人はその後
毎日のように
愛をはぐくんで

数日の後

精が出るの
吉三郎

何か良いことでも
あったのかの？

はい
まあ

あ
おはようございます
和尚様

では更に
良い知らせじゃ
お主武士に
戻れるぞ

つ…ついに
仕官の口が
見つかりましたか？

いや
婿入りじゃ

婿…いり…

先日
さる大名のご嫡男が
急逝されてな
世継ぎがおらんことが
幕府に知れたら大変じゃ
そこでお主を
先代が寺に預けた子
ということにという
話になっての

し…
しかし…

確かに
入り婿では
実家の家名は
継げぬ

だが
小なりといえど大名家じゃ
ご先祖にも面目躍如と
なるじやろし

ワシの面子も潰さんで
おくれよ

はい…

先方も幕府への
届け出もある

一兩日中に
返事をしておくれ

あんばい



どうすれば
いいんだ…?

和尚様の話は
願ってもない
良い話だ…

今時新たな
仕官など叶う
はずのないことだ
とわかっていたさ



だが婿入りと
なればお七殿を
……



今日はお元気が
ないようですけど…

すみません

ちよつと疲れて
いるみたいで…



私のこと…
飽きられてしまった
のではないだろうか?

そつそんなこと
あるわけないで
ござる!

それなら…
良かったです

どうかした
のですか？

実は…

家が修築され
お寺を出て行くことにな
ってしまったのです…

私！
吉三郎様と
離れたくない！

お七殿…

ですが
お母様には
逆らえません！

でも…でも
会えないと思うと
気が変になりそうです



お七殿
私も会えなく
なるのはとても
悲しいです

ですが
必ず会いに
参ります

しばしガマン
して下さい

はい

必ず会いに
来て下さいませ

ずっとお待ち
しております



和尚様
先日のお話ですが
自分にはすでに…

お七殿のことは
諦めよ



え?



二人の関係は
知っておる

今回の話は
お七殿の両親からも
お願いされておる

お七殿にも
品川の商家から
婿を取ると言つて
おられる

吉三郎も武士に戻り
先祖の……両親の
無念を晴らさねば
ならんのだらう？

これがお互いのため
なんじゃ
わかるじやろ？

……
はい……

それから半月ほど

……

んん……

……の
起きて
下さい

やっと起きて
下さいました
吉三郎様

おっ
お七殿!?



ああ
夢にまで見た
吉三郎様との
まぐわい

まるで
極楽浄土に
来たようすわ

んん！

お七殿…
ちよつと待つて…
実は私は…

うっ

なっ何を

わたし…
赤子^{やや}が
できまして
ございます

えっ?

そっそんな
早すぎでは…

あれだけ
愛し合った
のですもの
当然ですわ

それに…
ご覧下さい

ゴォォ

かつ体が…
動かない…?



それから
毎日…

夜になると
お七は現れ
朝になると
消えて行つた



乱れるお七に
吉三郎は逆らうことが
できなかった



ほら…

もうこんなに
大きくなりましたわ



吉三郎様

吉三郎には
わからなかった

それは贖罪なのか
若い性欲なのか
お七への愛なのか



ずっと…

ずっと親子三人
一緒…ですわ
吉三郎様

日に日にやつれていく
吉三郎

おう
吉三郎

先方と話が
まとまってい
来月の…

吉三郎

あつ

どうした？
吉三郎

なっ何でも
ありません
和尚様

—その晩
心配した
和尚が吉三郎の
部屋を覗くと…



ホィサグロ
サマ?

お七どの...

次の夜
護符を貼り
結界を巡らせ
お七の侵入を
防いだ

吉三郎様！

吉三郎様！

どうして
入れて下さら
ないのですか？

ややも泣いて
おります
吉三郎様！

さあ 熱い接吻を
いたしましょう

私の乳を揉み
乳首を甘噛み
して下さいませ

吉三郎様の
大きいイチモツで
濡れるホトを
貫いて五臓六腑の
蕩けるような
まぐわいで愛を
語り合いたしましょう

おやめなさい
お七殿
そなたも知って
おろう
縁がなかったと
諦めなさい

和尚様
……

申し訳
ござらぬ
申し訳
ござらぬ

ゆるせない…

どうして…
父上様も…母上様も…
和尚様まで…

皆で私たちの
仲を裂こうと
するのですか…

そんな人たち…



お七殿!

南無三!



大変です！

早く水を
持ってこい

お七殿…

パイパイ
パイ

火事だ！
早く火を消せ！



本郷の青物問屋
が火事です！

吉三郎様！
お七はここにいます

すぐに会いに
参りますわ

えっ？

吉三郎は後に
すべてを知った



寺を出たお七は
吉三郎との関係で
母から激しく
叱責され会うことを
禁じられた

それでも吉三郎の元へ
行こうとするので
蔵に閉じ込められて
しまった



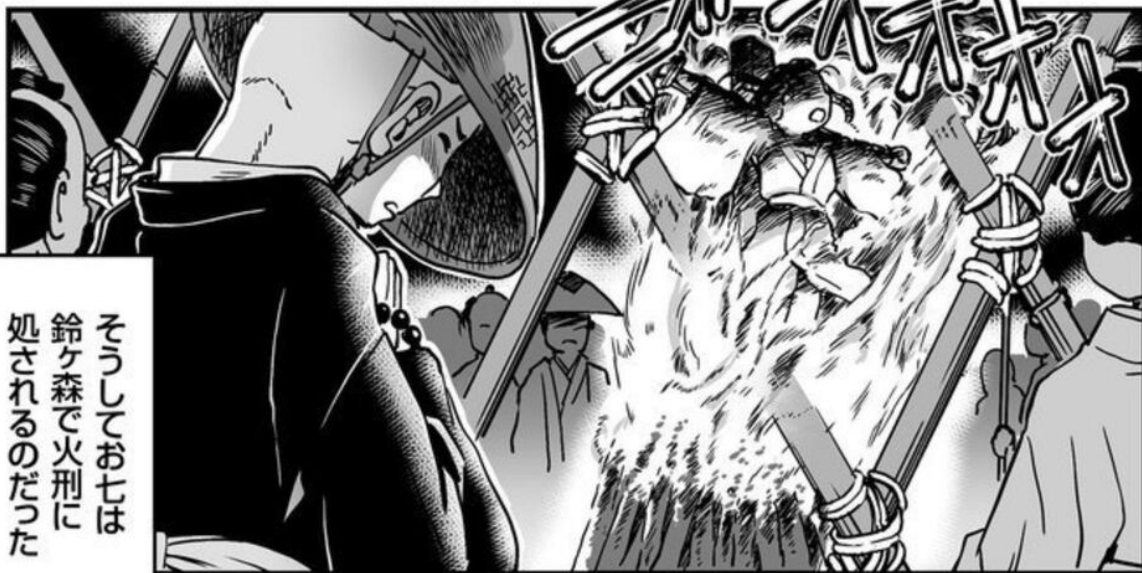
吉三郎に会えぬ
寂しさと絶望感で
やがてお七の心は
病んでいった

ああ…
きぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

そしてまた火事が
起これば吉三郎に
会えると思い
蔵に火をかけた
のだった



当時火付けは大罪
女であろうと死刑は
免れなかった



そうしてお七は
鈴ヶ森で火刑に
処されるのだった

吉三郎が見たのは
お七の想いの果ての
生霊であつたのだ

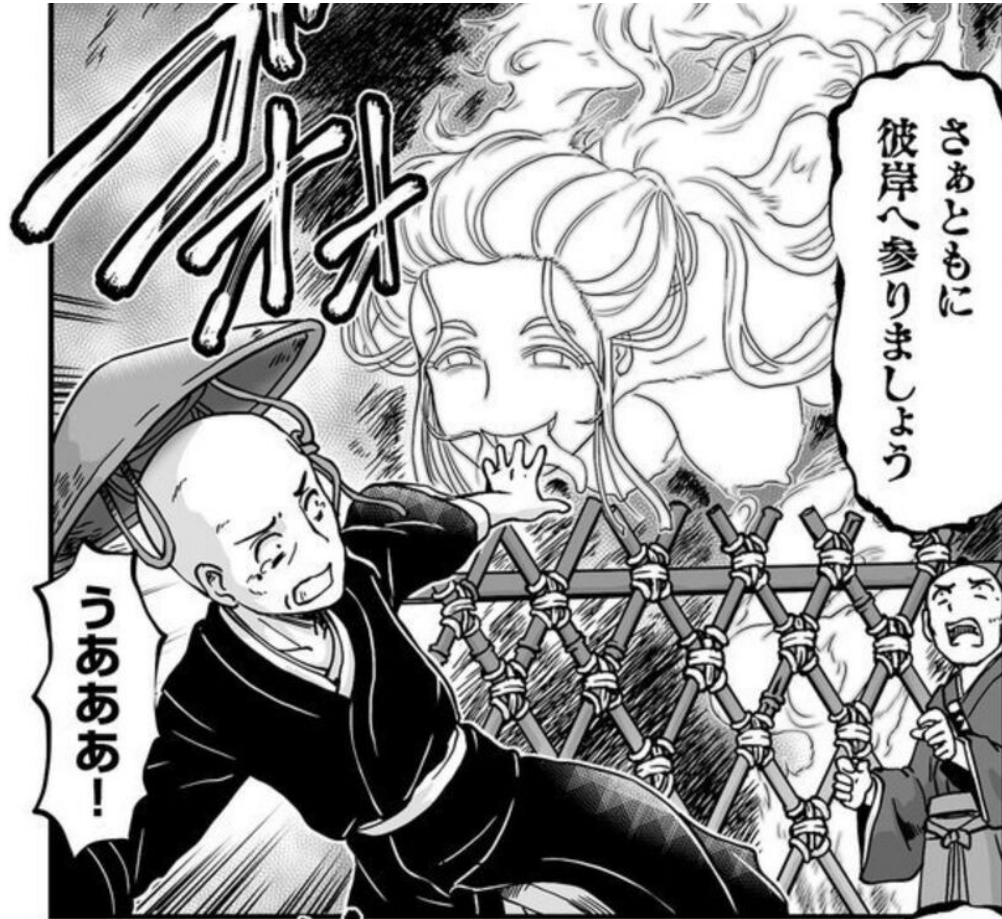
申し訳ござらぬ
申し訳ござらぬ

迷わず成仏
して下さい
お七殿

お七殿の生霊が…

うれしい…

逢いに来て下さった
のですね



さあともに
彼岸へ参りましょう

うおおお!



この世で添い遂げ
られぬのなら

あの世で一緒に
なりましょうぞ



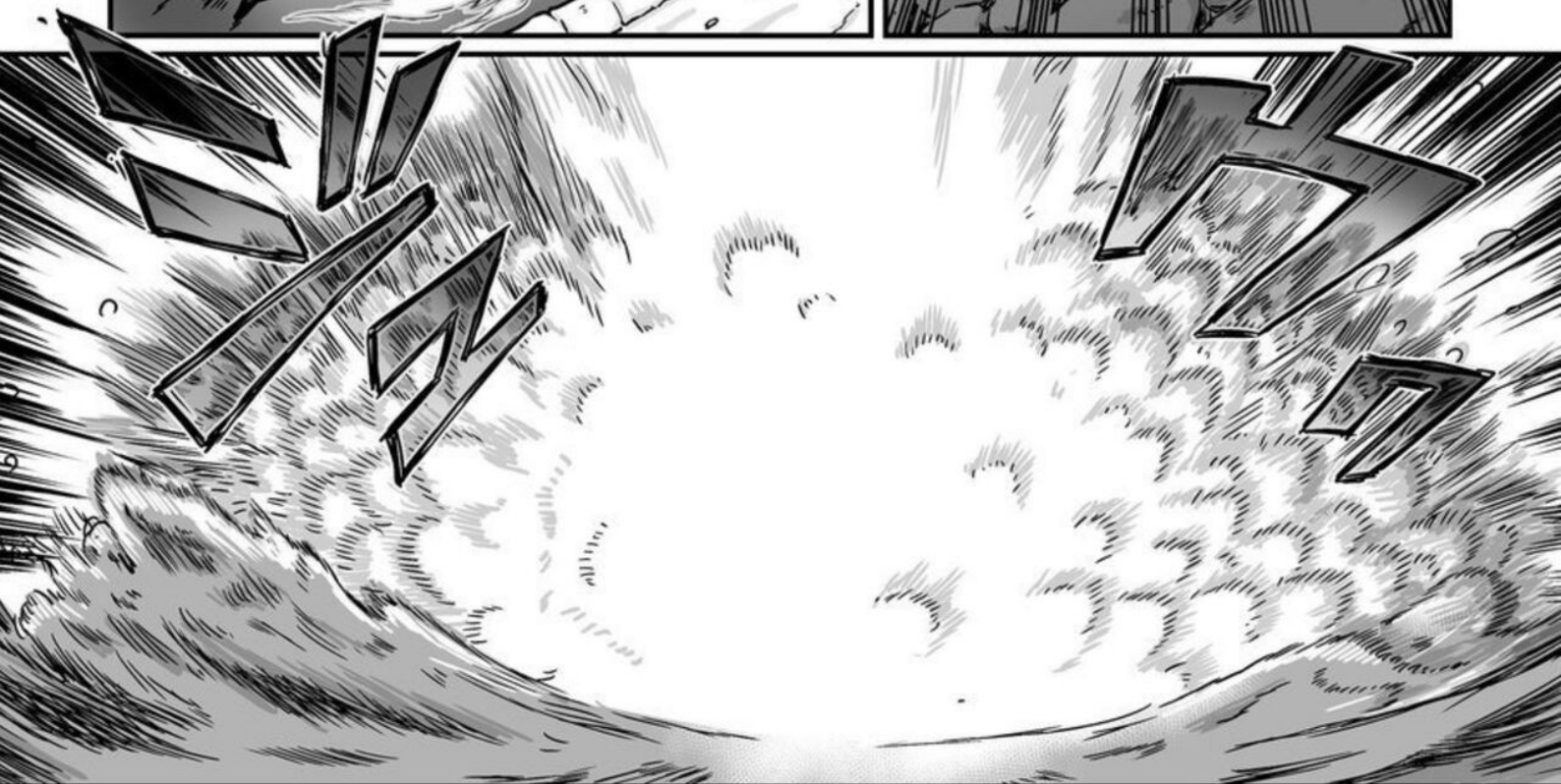
たっ
助けて!



まだ
死にたくない



許して下さい
お七殿



結局
あの世でも
結ばれぬ
二人であつた